

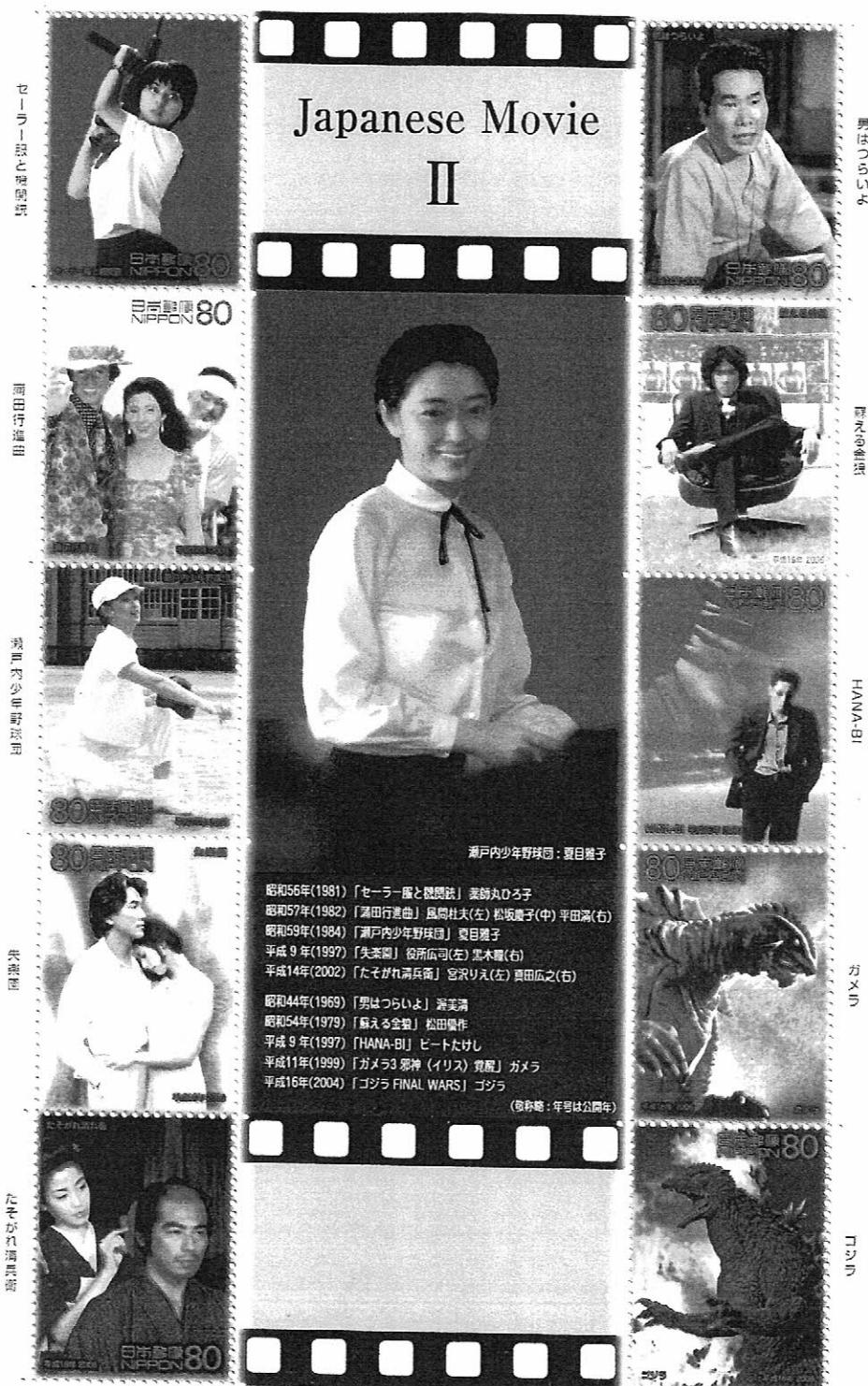
○日本映画 II (2006.10.10)

映画自体は、全く見ていないし、日本映画も、あまり、見ていない。そんなしだいで、邦画について、人に「これが良かった。」と言える作品もあり、持ち合わせていないが、個人的に好きな邦画作品は、1974年に、松竹で制作された野村芳太郎監督の「砂の器」です。もう、45年位も前の映画だが、「ゼロの焦点」、「点と線」、「Dの複合」等数多くの社会派推理小説で有名な故人、松本清張氏の作品を、当時の問題、ハンセン病を意識・反映して、制作されている。当時の出演俳優、加藤剛氏、緒方拳氏らも、いつの間にか、お亡くなりになりましたが、上手い、立派な演技をされ、良くできた作品に仕上がった事だと思う。この切手シートを発行するのは、どちらかと言えば、郵政省が判断すると思うが、この邦画、「砂の器」は、選考から外れた。それでも、今でも、テレビ番組で、出演キャストを変えて、放映されていて、日本社会では、まだ、情と理を重ね合わせて、人気があるみたいである。

加藤剛氏が演奏するピアノ曲「宿命」が、また、映画の持つ主人公の不幸にマッチしていて、涙を誘うが、当時の裏での不治の病、ハンセン病の持つ偏見、差別を考えさせられる作品です。

1974年当時は、まだ、ハンセン病は不治の病気だったが、1980年代に入り、リファンピシン、DDS（スルホン薬）、クロファジミンの3種類の抗菌薬を併用して、治る様になり、また。本来の患者さんは、90年代に入るまで、人権もなく、ご家族も噂などで、精神的な被害すらも被ったみたいだ。こういった医学、薬学の発展の上、社会も、徐々に、患者さんを支援するようになり、先日のハンセン病裁判では、国が控訴を取り下げる、患者さんの勝訴が決まり、喜ぶべき結果となったが、その裏側では、本当に、医療発展が、見えない形で、深く立ちいていることを考えざるをえない。同じ細菌感染で引き起こされる結核の予防、治療は、イソニアジドといった薬で過去の病になりました。今では、あのガンも治る病気になりつつあり、頑張る医療であると思う限りです。

日本映画 II



国立印刷局製造
平成18年10月10日